

言えばよかった

「トライやる・ウィーク」で学んだことは、たくさんあった。一番強く感じたのは、残念ながら今の自分ではそれほど人の役に立たないということだ。これから何を学んでいったらいいのか。福祉関係の仕事に就きたいという思いから、介護施設で「トライやる・ウィーク」の活動をしたが…。

外からは見えない苦労や辛さを知った今、将来のことを思うと、希望とともに不安も感じる。地域の人たちへの感謝の気持ちもあふれるほどある。けれども、どう返していったらいいのか。地域に貢献する大人になるためには、途方もなく遠い道を歩かなければならない気がした。

そんなことを思っていた時、その道標となるかけがえのない出会いが待っていた。それは、やわらかな若葉が、ぎらぎらとまぶしい初夏の日差しを受け、青葉へと変わろうとしていた時だった。

「トライやる・ウィーク」に続く地域学習が始まった。九月末の厳しい暑さの残るある日、二班のメンバー五人は記者となって海岸へと急いだ。「社会に貢献する人」の活動を紹介する壁新聞を作り、文化祭で発信することになったからだ。わたしたちは、約三十年間も松林の清掃を続ける笹谷さんにインタビューすることにした。

約東の時間ぎりぎりに到着したわたしたちを、笹谷さんはベンチでこやかに迎えてくださった。そこには、本物の新聞記者の方も一緒だった。

「亮さんから質問を始めた。見るとだらだら汗だ。

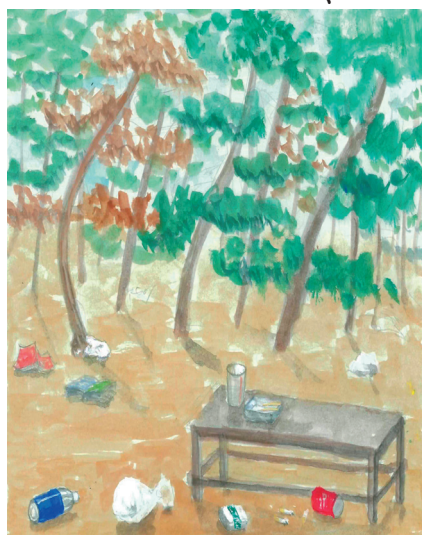
「きつかけは何ですか。」

緊張しているのか、亮さんはいつもより声が小さい。

「松が好きで、この活動を始めました。誰かに頼まれたという訳ではありません。わたしは、小さい時からここで遊んできました。この松林が、わたしを育ててくれたのです。そんな中で松に情が移ったという感じです。」

笹谷さんの声も小さかった。しかし、一語一語をかみ締めるように静かに話し始めた。

「昔の松林は、荒れていました。ゴミだらけで汚れていました。誰も傷ついた松を手入れしなかったのです。誰かがやらなければというもどかしさと、今すぐにでも何かしなければという切羽詰まった思いから、わたしにできることを始めたのです。」



遠くを見つめるその目には、昔の風景が映っているかのようだった。

「一年のうち、どのくらい清掃されているのですか。」

「三百六十五日です。」

わたしたちは、驚いたりうなずいたりした。さらに取材はゆっくりゆつくりと進んでいく。松の種類やボランティア仲間のこと、地域の子どもたちとの交流や手作りのベンチのことなど、話は際限なく広がっていった。わたしたちは、笹谷さんの情熱に圧倒されていた。しかし一方で、相当時間が経っている。拓也さんは、部活のことを少し気にしている様子だった。最後は、麻希さんがインタビューすることになっていた。大切な質問だ。

「わたしたち中学生に、伝えたいことは何ですか。」

「この松林を、美しいままで受け継いでほしいですね。そして、もつともつと自然と遊んでほしい。みなさんは、将来この町を離れるかもしれません。たとえ身は違う所においても、どうか心だけは、ふるさとを忘れないでください。」

数日後、わたしたちの取材風景は新聞に載り、周りの友だちから羨ましがられた。

浜坂中2年

壁新聞制作へ取材中

11月の文化祭で展示 人物テーマに

新温泉町浜坂の浜坂中2年生84人が、11月に開かれる文化祭で壁新聞を展示するため、取材を進めている。2日から、さまざまな分野で活躍する町民たちにインタビューを実施。若い「新聞記者」たちが、丁寧に質問を取りながら、丹念に質問を重ねている。

同学年は昨年の文化祭

でも、「自然をテーマ」に記事を書き、壁新聞を作って展示した。今年は人物にスポットを当て、クラスごとに芸術文化「社会貢献」などの分野で企画。9月から授業や委員会などを通して、取材方法や文章と見出しの書き方を学んだ。

2組の生徒5人は、浜坂民サンビーチ（同町）で、約30年間松林の清掃活動を続ける笹谷浩二さん（73）＝同町諸密＝にインタビューした。経歴や松林との思い出、活動内容を聞いた後、「未来のために私たちができることは」と質問をぶつけると、笹谷さんは「大人になっても古里の記憶に残るよう、松林に親しんでほしい」と力強く答えた。

取材を受け、「質問もすっかり考えられており、気持ちよく話せたり、笹谷さん。同校の塩川零土君＝同町芦屋＝は「笑顔で答えてくれたので緊張がほぐれた。笹谷さんの松林に対する愛を感じた」と話していた。インタビューは10月1日まで続き、壁新聞は11月4日の文化祭で披露される。（風斗雅博）



松林の中で笹谷浩二さん（左）の話を熱心に聞く浜坂中の生徒たち＝浜坂民サンビーチ

神戸新聞 2012(平成24)年 9月30日(日)

今度は、わたしたちの番だ。

「壁新聞のメインカラーは、松の緑と砂の色にしよう。」

みんなの意見はすぐに一致した。トップ記事を任されたわたしは、見出し・リード・本文と書き進めていくうちに、ある言葉を随所に使っているということに気がついた。そして、そのある言葉は、他の班員の記事にもたくさん使われていた。

わたしたちの「松林新聞」は、取材の日には一度も出てこなかった。「愛」で埋め尽くされ、完成した。

文化祭当日。先生から笹谷さんが新聞を見に来てくださったことを聞いた。一緒に来られたたぐさんのボランティア仲間の人たちと、「いい新聞ができた。」

と他の新聞も口々に褒め合い、そして、指導された先生たちにねぎらいと感謝の言葉をかけて、喜んで帰られたそうだ。

その話を聞いて、わたしは、はっとした。笹谷さんは、自然だけに優しかったのではなかったのだ。

笹谷さんが旅立たれたと聞いたのは、三年生になって間もなくのことだった。取材のあの日、穏やかにゆつくりと話をされたのは、実は重い病気のせいだったのか。気づかなかった。いや、気づけなかった。わたしたちはただ、自分のインタビュアの番までドキドキし、答えを聞いてはひたすら書き取るばかりだった。

かつての二班のメンバーが、何か見えない力に引き寄せられるように、廊下の隅に集まった。和樹さんが、下を向いたまま言った。

「今度、みんなで松林の清掃に行こう。」

わたしは、あの日の笹谷さんの最後の言葉を思い出していた。あれは、わたしたちへの精一杯のエールだったのか。心の底から、悔しさがこみあげた。あの時、

「はい、分かりました。安心してください。」

「わたしたちが、その心を受け継ぎます。」
と、言えばよかった。

